

異化現象としての文化

河 底 尚 吾

1

「平成」の米騒動は国際的性格をおびて、すくなくとも日本人は世界にむかって一つの決断をせまられるまでになった。なんで米を輸入しなければならないのか、という割りきれない思いをいなく日本人は、米ならいくらでも日本で生産できるという確信と、米は日本人を育く^{はく}んできた主食だという自負とが入りまじって戸惑いを感じているのだ。

この問題を石油に移して考えたならどうなるだろうか。A産油国がB産油国に対し、減産をして価格の低いA産油国の石油を買い入れるようにせまったとしたら、B産油国はどのような対応を示すだろうか。もちろん、両国の貿易バランスはAの方が入超状態にあると想定しての話である。もう一つ、対比の例としてあげるなら、自動車や先端技術の問題がある。日本とアメリカとの関係で言えば、アメリカ側は日本の米問題に通じるような感情がこのハイテク産業の分野で生じているかもしれない。なぜなら、この分野はアメリカが多額の資本と労力を投入して開発し育成してきたものであるから。

国際的な経済摩擦といわれているこれらの諸問題は、ただ数字の帳尻をあわせればすむというわけのものではなく、それぞれに特異の性質をもった根から表出した結果なのだ。しかもその根は深く輻湊している。その好例が米の問題である。おなじ食糧でありながら、日本人にとって麦はそのほとんどを輸入に依存している。

これについては米の輸入のような抵抗感はない。日本の風土が麦の生産に適していないというわけではなく、また日本人は麦を常食としないというわけでもないのに、日本人は麦よりも米に生存のすべてを託しているかのような生活感情をかきたてるのである。たしかに統計的な数字から見れば、小麦の年間生産高は米の生産高の平均9%程度であり、いかにも日本人は米なくては生きて行けない感じを与えるが、それらの需要量から見れば、政府保有の枠内だけでも日本人は米よりも小麦の方をはるかに多く消費しているのである。とくに近年は米の2.5倍以上も小麦の需要があり、しかも米の方は年とともに需要が低下して行くのに、小麦の需要量は大体一定している。参考までに、総務庁統計局の資料を示しておこう¹⁾ (次頁参照)。

米の生産高と需要量がともに減少し、麦の生産・需要量が安定しているということは、冒頭にのべた日本人の米主食論の根拠がかなりぐらついていることを意味している。それにもかかわらず日本人が米食に対してゆるがない「自負」と、その根拠がぐらつくことによる「危機」意識とが入りまじった感情を抱くのはなぜか。現状では、米の供給が絶えるよりも麦の供給が絶える方が数倍も深刻な問題であるはずなのだ。マクロ的にこの問題を観察すると、1985年～87年における世界の米生産量は年平均4億6,700万トンで、これは小麦の5億2,000万トン、とうもろこしの4億8,700万トンにつぐものであるが、貿易市場の面から見れば、米は小麦の

米・小麦の需給
Demand and Supply of Rice and Wheat

(1000t)

年度間 fiscal year	米 Rice (玄米 rough)						
	生産高 Production	政府所有米 Rice under government management				需要量 Demand	主食用 For staple food
		供給量 Supply		買入 Purchases			
		持越 Carry-overs	国内産米 Domestic rice	輸入米 Imported rice			
(0010)	(0020)	(0030)	(0040)	(0050)	(0060)		
60(1985)	11 662	2 494	4 343	17	3 699	3 477	
61(1986)	11 647	3 155	4 096	18	3 635	3 416	
62(1987)	10 627	3 634	3 670	14	3 415	3 301	
63(1988)	9 935	3 903	2 227	13	3 040	2 968	
1(1989)	10 347	2 642	1 873	12	2 154	2 091	
2(1990)	10 499	2 342	1 798	13	1 924	1 890	
3(1991)	9 604	2 012	1 421	12	1 783	1 767	

年度間 fiscal year	小麦 Wheat (玄麦 crude wheat)						
	生産高 Production	政府所有小麦 Wheat under government management				需要量 Demand	主食用 For staple food
		供給量 Supply		買入 Purchases			
		持越 Carry-overs	内麦 Domestic wheat	外麦 Imported wheat			
(0070)	(0080)	(0090)	(0100)	(0110)	(0120)		
60(1985)	874	1 281	777	3 968	4 779	4 603	
61(1986)	876	1 247	774	3 992	4 804	4 635	
62(1987)	864	1 203	742	3 937	4 709	4 546	
63(1988)	1 021	1 319	895	3 927	4 677	4 523	
1(1989)	985	1 318	813	3 814	4 682	4 522	
2(1990)	952	1 263	804	3 908	4 678	4 510	
3(1991)	759	1 294	601	3 963	4 779	4 611	

資料：農林水産省『農林水産統計月報』1993, より。

5分の1で約1,200万トンにすぎない。これは日本の年生産高とほぼ同量である²⁾。要するに、これはよく言われているように、米の市場取引は稀薄 (thin) であるという根拠になるのであるが、そこに需要者側と供給者側との見かた、考えかたの相違が生じてくるのも事実であろう。たとえばアメリカのばあい、穀物総生産のうち、とうもろこし58%、小麦24%に対して米のしめる割合は1.6%であり、しかも日本人が主食としている米は中短粒種 (ジャポニカ) であるから、アメリカが日本向けに米を輸出するとなれば、長粒種をのぞいたさらにすくない総生産量1%以下の米からということになる。それは

アメリカにとってとるにたりない数字であるが、日本にとっては生活をおびやかす数字に見えるのである。

数量的な問題はもうこれで充分であろう。肝心なところは、小麦を米以上に消費している日本人にとって米のかわりに小麦を主食とすることができないという点である。このことはひとり日本人だけではなく、地球上に生存する人間がどこの地域にあってもひとしくかかえこまざるをえない問題なのだ。米を常食としている地域の住民に小麦を常食とするように強制することはできないし、その逆に小麦を常食としている住民に米を押しつけることもできない。とう

もろこしや他の食物についても同様である。したがって食料の貿易摩擦はただ経済問題だけでなく、生存のしかたの問題と深くかかわっているし、その点で自動車や半導体の貿易摩擦とは大いに性質がちがうことを認識しておかねばならない。

食料、石油、自動車、ハイテクと私は4主要産業を列挙してきたが、言うまでもなくこれらは人間の技術によって生産されるものである。それと同時に、人間の技術だけではどうにもならない要素も考慮しなければならないことを、これらの産業は私たちに訴えかけているように思われる。そのもっとも大きな特徴は、これらの産業が天然資源に依存しているということである。食糧生産に至っては自然そのものの恩恵がなければ成立しない産業である。もちろん、石油は天然の資源だ。ここに自然物と人間の技術を介して生産される人工物との関係が明確に浮かびあがってくる。たしかに「人工的」(artificial)であることは、「自然的」(natural)であることと大いに相異なる。しかし日常生活において、およそ「作られたもの」という意味での生産物で、完全に人工的なものはないし、また完全に自然的なものもない。生産物はすべてなにがしか人工的であり、なにがしか自然的である。米の生産はその多くが自然的であり、自動車の生産はその多くが人工的であると言うことができる。

H. S. Simon は「人工物は自然の法則を無視したり、破ったりはしない。それでいて、人工物は、人間の目標や目的に適應するものである」と適切に指摘し、「われわれのいう人工物とは、自然からかけはなれたものではない」³⁾とのべているが、人工と自然とがかけはなれたところに、人間の生活はありえないことを私たちは認識すべきであろう。石器時代から今日に至るまで、人間はかたときも自然からはなれて生きたことはないし、また自然のままに生きたこともない。人類が進化論的な発展過程のなかにあるとするなら、人類はつねに自然への適應

と自然の人間への調整とを実行してきたのだと言っ
てよい。地球上で生活する私たち人間の衣食住が、すべて一様でないのは、地球環境が一様でないことと対応している。米の問題に話をもどすなら、前にもふれたように、日本の米は中短粒種(ジャポニカ)が主流であり、長粒種(インディカ)はほとんど流通していない。生産地域から見ても、中短粒種の米を生産しているのは(すくなくとも輸出能力があるのは)、日本のほかに中国、オーストラリア、アメリカの地域に限られている。穀物としての米ならば、地球上で広く生産されているのに、ジャポニカ、あるいはインディカとなると、生産・消費地域が限定されてしまう。さらに種類を選定し、コシヒカリとかササニシキといったような品種にだけ固執すれば、消費地域はさらに限定されるだろう。この限定のされかたは消費者の趣味や習慣のほかにさまざまな条件によって決定される。その最も大きなものは自然的条件と人為的条件である。

米の生産は気候風土によって決定的な限定をこうむる。また生活にかかわる経済上の問題から、米の安定供給、品質管理の面において増産、減反等の調整をはからねばならない。日本におけるジャポニカ米の消費がこのような条件の中で決定されるなら、他の地域のことなる穀物についても同様のことが言えるはずである。こうして地球上の穀物分布地図ができ、そこにかつてワラスが区分した動物分布地図や、現在の植生分布地図にも通じる食文化のニッチ状況が確認される。人間の生活内容である文化はつねに自然との接触の過程で生じるものである。自然的条件は人間にとって、いつのばあいでも与件(data)として出現し、人間はこれに対して受動的に反応するほかはない。それは個人で言えば、感覚が外部の対象を受動的に把握するほかはないのと似ている。個人が能動的になりうるのは、感覚器官以外の発声器官や運動を生じさせる身体そのものの動作によって、内的意識を表現するばあいに限られる。しかもこの表現行

為こそがその個人にとって唯一の創造的生活の証^{あかし}なのである。それは外的条件あるいは環境に対する、個人の生きかたの証明と言うこともできよう。一般的に人間は外的条件（環境）に対して受動的であり、内的意識あるいは欲求の表現行為は能動的にならざるをえない。穀物の冷害、あるいは凶作に対しては、それが外的自然条件によって左右される結果であるゆえに、人間はこれを甘んじて受け入れるほかはない。しかし、それで終るわけではなく、たとえば冷害や害虫に耐えうる穀物の品種改良や増産政策や応急の需給態勢をととのえる。それが人間の創造的生活なのである。つまり、自然と人間との関係から、データや意思や行動が生じ、その総合が表現と言われる現象となる。能動的な表現行為の前提にはデータ処理、意思決定、行動選択というそれぞれの階層を内包している。

人間は自然のなかでただひとり放置されると、本来そなわっている表現能力が極度に低下することが、『アヴェロンの野生児』の例からもうかがい知ることができる。J. M. G. Itardはその著書のなかで、「私は耳がある程度まで音を知覚しはじめたのにその音を声で繰り返さない原因を、次のように考えるようになった。すなわち、それは発声器官の組織がそなわっているからではなく、不遇な環境にいた結果なのだ。われわれのさまざまな器官は、ぜんぜん訓練しないでいると機能できなくなってしまう」⁴⁾と報告している。南フランスのアヴェロンで捕えられたとき、この野生児は推定11~12歳で、その後6年間にわたるイタルによる訓練教育にもかかわらず、「白痴」と断定されるに至った。しかし、この子が白痴であるのは生まれつきなのか、人間としての教育をうけるべき時期に自然児として過ごしたせいであるのか、その判定は不明のままである。いずれにしても、事実として、与えられた感覚機能が訓練によって、人間的な感覚をとりもどしたことは注目すべき成果であろう。問題なのは或る程度の感覚能力をもっている、それによって集められたデー

タの処理能力が欠け、さらに表現（たとえば言語や表情、身ぶり）へ結びつく経路が不備であるならば、人間としての生活が充分にはたされないということである。事実、「アヴェロンの野生児」はついに人間の言語を話すには至らなかった。

自然的であることと人間的であることとの相異は、かつての人文主義者や自然主義者たちが考えたように、その一方が他方の規範と仰がれ、主従の関係でむすばれるというようなところではなく、自然は時系列的不可逆性にもとづいて階列的に運動し、人間は場系列的可逆性を主体として階層的に運動するという両者の元理^{アルケー} (arche) のなかに見出される。しかもこの両軸は並列的ではなく、つねに交差輻湊しているので、時間・空間の意識は人間の生活から消え去ることはない。人間生活はたえず自然の存在に直面し、人間は永久に自然にとりかこまれている感じを抱きつづける。また、人間の可逆的恣意的運動は、自然だけではなく自己以外の他の人間の存在にも直面し、「おまえ」と呼ばれる人間をたえず見近かに感じないではいられない。それが人間みずからがうみ出す「環境」であり、環境はけっして固定的ではありえないのである。自然は階列的環境によって人間へ直面するのに対し、人間は階層的環境を形成しながら自然へ直面するわけであるが、人間はその階層的環境を創造することによってみずからの生存を維持していることを、つぎに別の視点からいくつかの例をあげて考えてみたい。

2

ここに一つのエピソードがある。話は古すぎるほど古い、古代ギリシア人が人間生活の初元についてどのように考えていたかを知るには、現代の私たちから見ても興味をそそられる話である。語るのは、若い支配者ゼウスに罰せられ、人影もないカウカソスの山上に鎖で縛りつけられたプロメテウスである。

今は人間たちの不幸を聴いてくれ。彼らは西も東もわからなかったのに、私が思慮分別をさずけて、彼らに光明をもたらしてやった。これから私が話そうとするのは、彼らに不満があるからではなく、ただどんなによいことを私が彼らにしてきたかはっきりさせるためなのだ。

まず、彼らはものを見ても、いたずらに見ているだけ、なにか聞いても、全然聞いていなくて、夢の中のぼんやりした幻のように、彼らの素朴な生活の長い生涯をなにもかもうやむやのうちに過ごしていた。日光のよくあたる煉瓦造りの家を建てることを知らなかったし、材木で仕事をする術も知らず、地下の土深くもぐって陽のあたらない洞穴生活をしているさまは、まるで群をなす蟻のようであった。

彼らには冬も、花咲く春も、果実の実る夏も区別するたしかなしるしがなにひとつなく、彼らのすることなすことすべては、なんの見さかいなしに、それぞれのなり行きまかせであったのだ。そこでとうとう天の星が東に昇り西に沈むという、むずかしい観察を私が彼らに教えてやったわけだ。数字にしてもそうだ。この第一番の知恵を彼らに見つけてやったのは私だし、巧みに技をこなすムーサ女神たちの母、あらゆるものの記憶をたすける文字のつづりかたをも私は見つけてやった。また私が最初に動物どもを輓くびきにとりつけて働くようにした。それで人間の最もつらい労苦を動物たちが受けもつことになったし、手なづけられた馬を車にとりつけ、裕福な支配者には輝かしい誇りをそえてやった。さらにまた私のほかにだれひとり、船乗りたちが海を渡って行く麻布の翼を張った乗り物を作り出した者はいない。このようにさまざまな技術を人間たちのために与えてやったのに、あわれにもその私は自分が受けている災難をのがれる手だて一つ見つからないありさまなのだ⁵⁾。

——『縛られたプロメテウス』442-471

前5世紀のアイスキュロスに代表される知識階級には、人間の無知とゼウスの横暴な権力とが、どんなに社会の進展、あるいは人間の幸福のさまたげになっているかに気づいていた者が多数いたにもかかわらず、民衆の無知無爲のまえでは、無謀な僭主に対してと同様、手のほどこしようもないさまが、この鎖でしばられ身うごきできないプロメテスによって象徴的に浮き彫りされている。

最初に彼は人間の不幸を思慮分別のないところから説きおこしている。ここで言う「思慮分別をさずける」とは、人間の内的環境をととのえさせるということを意味している。したがって、その内的環境が形成されないうちは、「なにか聞いても、全然聞いていなくて」という状態にならざるをえない。これは感覚器官を通じて外界の情報を受け入れることはできても、その処理能力を欠いているために、「夢の中のぼんやりした幻のように」外界を見つめているにすぎない結果になることを言いあらわしている⁶⁾。「アヴェロンの野生児」がその現実における好例である。彼の感覚はよみがえった。しかし彼の精神（心）は人間的に回復しなかった。プロメテウスが言うように彼の内的環境は「幻のように」混沌として、「なにもかもうやむやのうちに過ごしていた」のである。

その混沌からぬけ出すために、プロメテウスはさまざまな技術を人間にあたえた。その分野は建築、天文、数学、言語、牧畜、農業、造船、医術、占術、鉱業、等、およそ人間生活に必要なあらゆる技術を網羅している。ところで、これらの技術は自然に存在するわけではなく、人間によって考え出されるものであるから、人間本位の創造物と言えよう。人間は身体的には自然物であり、精神的には人工物であって、人間は人間を生むことはできても、人間以外のものを生むことはできない。そういう意味では人間は他の動植物と変るところはない。しかし、

人間は身体以外のものを作ることができる。そう言えば、すぐさまあのアリストテレスのことばを想い出す人が多いだろう。「人間は人間から生まれるが、寝台は寝台から生まれはしない。だから寝台にとって自然というのは、形ではなくて材木だと言われるのである、つまり寝台が芽を吹き出すとすれば、生まれてくるのは寝台ではなく材木だろうということなのである」⁷⁾ (『自然学』Ⅱ, 193b)。この例に出されている寝台は言うまでもなく人間によって作られたものであり、技術の産物である。人間が人間を生むことは本質にかかわることであり、自然である。それと同様に檜の木が檜の木を生むことは自然である。アリストテレスも言っているように、「自然」(φύσις)は「生成」(γένεσις)と同義語であり、自然はものを生み出すことと関係がある⁸⁾。しかも、自然は生成であるかぎりにおいて運動と変化の渦中にあるが、それは檜の木や人間の身体に共通する要素である。ところが人間は自分の身体を媒体(道具)にして、檜の木から寝台を作ることができるが、檜の木はそのような行為は不可能である。つまり、人間は自分自身から人間を生み出す自然的技術と、自分以外のものを作り出す人間的技術とをそなえている点で自然物とは相異なる。自然的技術は自然に共通な時系列的階層運動であり、人間的技術は人間に共通な場系列的階層運動であって、人間は両者の運動の交錯するなかで生活している。

技術はその対象が具体的なものであっても、抽象的なものであっても、なにかを作り出すことを目的としているかぎり、人為的であり恣意的である。自然に接近すればするほど人間的行為はうすれ、その運動は必然性をおびてくる。極端に言うなら、なにもしなくてもその存在が保証されているのが自然である。そのような世界に住む人間をヘーシオドスは「黄金の種族」と呼んで、神とおなじく、大地から自然に生まれた人間の最も幸福な時代として位置づけている。

神神のように彼らは憂いのない心をもって、労苦や悲歎から遠くはなれて暮していた。みじめな老齢が訪れることもなく、つねに手足は衰えず、悪という悪からはなれた楽しい^{うたげ}宴の中で心をなごませていた。いざ死に赴くときには、まるで眠りにつくようであった。彼らにはあらゆる善がそなわっていた。穀物畑は多くの豊かな収穫をひとりでもたらした。彼らは平穩無事に多くの善いものづくめの中で生活していた。大勢の家畜にめぐまれ、至福の神神に愛されつつ。⁹⁾——『労働と日々』111-120

ここに描かれた世界には、およそ「技術」もしくは「人工物」という人間が作り出した産物はどこにも見あたらない。すべてが与えられた「自然」そのものである。自然は人間にとって頼り甲斐のある神にもひとしい存在なのである。その後、人間はしだいに傲慢・乱暴を身につけ、黄金族とは身体的にも精神的にも似ても似つかぬ「白銀族」の時代へ転落して行くが、「彼らはなげかわしい軍神アレースの争いごとや横暴なふるまいにふけて……(中略)穀物を食べず、心は鋼鉄のように頑固で、手のつけられない^{やから}族」に変貌する。さらにヘーシオドスと同世代(前8世紀)の「鉄の種族」と呼ばれる人間の第5世代ともなると、「私はこの第5世代の人間たちとは一緒に生きたくはなかった。せめてこの前に死ぬか、後に生まれるかして」と詩人自身に言わしめるほど嫌悪され、「昼は労苦と悲歎が止むことなく、夜は夜で神神がきびしい苦難を与え、命がすり減らされる」ような時代に立ち至るのである。鉄の種族とは、言うまでもなく現代の私たちの時代でもあるわけで、その苦難のさまは人間が自然に生きる道から訣別し、技術に生きる道をえらんだときから、人間が直面しなければならぬきびしい現実の姿と言えらるだろう。

18世紀ヨーロッパの知識人たちが、さかんに自然を稱揚するあまり、人間の知性(理性)を

いかがわしい目で見えていた時代があった。Alexander Pope は『人間論』(An Essay on Man)の中で、「敏捷な本能 (Nature) は幸福をつかむに早く、鈍重な理性 (Reason) は徒らに苦勞して幸福に達しない。本能はまた常に奉仕し、理性は長くは奉仕しない。前者はかならず正しく、後者は誤ることもないではない。つぎに行動し、比較する力を見るがよい、動物においては一つであるものが、われらにおいては二つになっている。理性を本能の上に置くのは勝手だが、本能の導きは神で、理性の導きは人間なのだ¹⁰⁾と歌っている。ここで本能と訳されているものは「自然」のことで、神が定めた法則ともいべきものである。人間が理性を自然以上に価値があると考えても、人間は誤謬という不確実な要素をかかえているので、所詮、「かならず正しく」進む (One must go right) 自然にはかなわない。その結果、人間は「誤ることもないではない」(the other may go wrong) という自覚によって、「正しさ」への志向を高めるのである。しかし、これはかつて古代ギリシア人たちが考えた人間観と、なんと相異していることか。「寝台から寝台は生まれぬ」という自然の本性に対して、人間は人間を生み、かつ寝台も生産するという、自然には不可能な「技術」(techné) を人間はもっていることを、彼らは積極的に評価しているのに対し、18世紀の文人たちは自然と理性 (人間) との優劣関係にひたすら腐心しているのである。

18世紀といえば、ちょうどその中期に、J. - J. Rousseau が『学問芸術論』(1750) を世に送り出し、各界にさまざまな反響をおよぼしたことを人びとは想い起こすであろう。彼は「学問と芸術とが生まれたのは、われわれの悪に由来する」と言い、またそのような起源をもつ学問芸術の目的にも欠陥を見出している。「芸術を育てる華奢 (le luxe) がなければ、芸術はどのようなだろうか。人間の不正がなければ、法学 (la jurisprudence) はなにに奉仕するというのか。独裁者も戦争も陰謀家もいなかったなら、

歴史はどのようなだろうか。一言で言えば、人間の義務や自然の必要だけを考慮して、各人が祖国や不幸や友人たちのためだけに時間を費すとしたら、いったい、だれが無駄な瞑想にふけて一生を過ごす気になるだろうか¹¹⁾。このように学問芸術は、ルッソの目から見るかぎり、その起源においても目的においても、さらにその結果においても無益の産物にすぎない。それどころか、危険かつ有害 (préjudice) ですらあると言う。しかし、ルッソは学問芸術の価値そのものを否定しているわけではない。「学問 (la science) はそれ自体大それた構造物であり、そのことは明白である。そして、これに反論するには、良識と縁を切らざるをえないだろう。万物の創造主は真理の根源であり、全知は神の属性の一つである。だから知識を獲得し、その光をひろげることは、言ってみれば、最高の知性に参与するということになる¹²⁾と彼は証言しているのである。では、なぜ、ルッソは他方で学問が危険で有害とまで言い切ったのだろうか。「なぜなら、学問はどれほどりっぱで、どれほど崇高であろうと、けっして人間にはふさわしいものではなく、人間は学問で大躍進をとげるにはあまにも限られた精神の持ち主であり、学問を悪用しないようにするにはあまりにも心の中に情念がありすぎるからだ」と、彼は理由づけをしている。学問は人間にふさわしいものではないとか、人間はそれを悪用せざるをえないというのは、学問にたずさわる人間の精神に疑念を抱いているところから生じる発言であろう。つまり、学問を与えるのは神、学問を利用するのは人間なのであって、利用する側に欠点があるならば、どんなに「純粹」で「稱讃されうる」学問であっても、悪の原因になってしまうわけである。それが、ディジョンのアカデミーがあたえた課題、「学問と芸術の復興は習俗を純化するのに貢献したかどうか」に対するルッソの回答であった。この問にある「学問」(les sciences) とは「科学」でもあり、「芸術」(les arts) とは「技術」でもあって、

ルッソは前者に「自然」すなわち「神の与える法則」を見、後者に「人間の情念」を見たのである。いわば、自然は神の創造物であり、さらに技術は自然から生み出された知識であり、人間はそれを手に入れることによって「最高の知性に参与」するわけで、人間は技術知識の生みの親ではなく、その利用者として考えられている。

この見解が正しいか正しくないかの判定はさておき、これまでのさまざまな意見を通覧すると、私たちは自然と人間との対立関係が、実は製作者と使用者との関係でなりたっていることを知るのである。しかも自然はみずからが製作者であると同時にその使用者であり、両者は一体であるが、人間は製作者と使用者との分業でなりたっている、いや、むしろ分業でなければなりたないと言うべきかもしれない。人間の一つの対象物は二つの目的、つまり二つの相異なる技術をもつ。アリストテレスの例で言うならば、船の舵取りは舵がどんな形をしているかを知っていて命令をくだすが、その舵を作る者はそれがどんな材料からでき、どのように加工すれば舵になるかを知っている者なのである。しかし自然はそのような相異なる技術をもたず、はじめから材料として存在している。このことは、ポウプのばあいにも共通して見られる。そのことについて彼は動物（自然）と人間の相異を、前者は行動力と比較力とが一つであるのに、後者はそれらが二つにわかれていると指摘したのである。これは自然においてなりたつ一つの運動が、人間においては二つの運動（技術）からなりたつことを意味していると言えるだろう。ルッソが、「純粹」で「稱賛されうる」起源と目的をもった学問も、ひとたび人間の手（使用者）にわたると、悪の根源と化してしまうと考えるのは、人間が日常ふりかざす how to make と how to use という両刃の剣（技術、知識）に問題があると言いたいのであろう。ヘーシオドスが描いた「黄金族の時代」こそ、ルッソだけでなく、人間不信の思想を抱く者に

共通して見られる、人間のユートピアなのである。

3

たしかに人間は自然のように単純明快な因果関係で説明できる面と、それができない面をもつ。自然によって生成する「自然物」の因果関係は、それが中断されることなく、また可逆的でない、時系列によって維持されている。これに対して人間によって生成される「人工物」の因果関係は、自然物がもっている関係のほかに、恣意的で可逆的な場系列によってささえられた関係も見られる。これらをそれぞれの対象物（自然、人間という材料）によってまとめると、つぎのようになる。

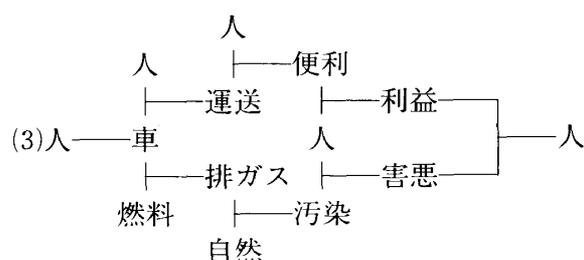
- (1) 自然——自然→自然物…… a)
- (2) 人間 — { 人間→自然物…… b)
 { 自然→人工物…… c)

a) のように、自然が自然自身を素材として自然をうむのは「自然物」の特徴である。また b) のように、人間が人間自身を素材として人間をうむばあいも「自然物」と言うことができる。たとえば、a) のばあいは、ヒノキからヒノキがうまれる、蛙は蛙からうまれる、というのがその例であり、b) ならば、人間は人間からうまれる、というばあいである。c) は、人間によってヒノキが材木となり、さらに材木は家になる、という例をあげることができるだろう。主体が自然であれ人間であれ、目標に至る媒体が主体と相異なるばあい、その結果として現象するものは自然物と呼ぶことはできない。自然が人間を媒体（材料）とすることは考えられないし、かりにそういうばあいがあるとしても、その媒体は人間の自然物としての身体であるから、それは(1)の分類に属する。ということは、人間は自然物をうみ出す存在であり、同時に人工物をうみ出す存在でもあるということである。

かである。人工物には自然と人間との子がいるほかに、人間と人工物との子も生成し、自然と人工物との子もうまれてくる。そうなれば、人工物Aと人工物Bとの関係が生じ、その両者のあいだで協力も反目もおこなわれるだろう。その先のことは、いまは省略するとしても、自然、人間、人工物の関係はいよいよ複雑化し、ついには名づけようもないさまざまな関係が生じて、あらたな「カオス」状態が発生するのではないかと思われる。いま一つの例として、人間と人工物、および自然との関係を簡単に図式化すると、つぎのようになるだろう。

(1)人—車—運送—便利—利益—人

(2)人—車—排ガス—汚染—害悪—自然—人



おそらくこの図を見て、多くの人は枝のつながり具合に違和感を覚えるにちがいない。しかし、(1)と(2)は通時的に読めば、私たちの常識の範囲内でおさまることがらを語っているのだとわかり、(3)は人それぞれの考えかたによって選択肢がことなるはずであり、もっと他の要素が入りみだれて複雑な図ができあがるだろう。要するに、この図はだれもが考えつくことを分類したにすぎないのである。ただ、ちょっとくふうしたところは、すべて人に始まって人に終らせた点である。人がつくり出した人工物は、それが利益をもたらすものであれ、害をおよぼすものであれ、その結果は人に収斂される。(1)のような楽観論者も、(2)のような悲観論者も、結局は(3)のような構図の中で想像をめぐらして問題を解決するほかはないし、そうすべきであろうと私は思う。人間は人工物を生産し、使用するが、人工物もまた人間の意志とはかかわりな

く(その点では自然とおなじであるが)、そのものとは本質的にことなる新物質を生産する(その点では人間と共通している)という、自然的性質と人間的性質をもつ。

H. A. サイモンは、人工物が自然物と区別されうる点を四つあげているが、それを要約するとつぎのようになる¹³⁾。

1. 人工物は人間によって合成される。
2. 人工物は自然物の模倣であるが、自然物の実質を欠く。
3. 人工物の特徴は、その機能、目標、適応にある。
4. 人工物は設計の段階で、記述法だけでなく命令法でも論議される。

これらは、人工物が生成される原因ともいうべきもので、人工物は人間の手によってつくられ、自然物とは材料を異にし、目的があり、完成した形をもつ、というように解釈できるのではないかと私は思う。したがって、これらの各要素はばらばらに存在するのではなく、一つの人工物についてかならず見出される要素であるということができるだろう。しかし、これだけの要素を指摘するだけなら、単なる思弁に終わってしまう。現代の科学は結論と思われるこれらの要素を出発点として、アリストテレスから手を切るのである。サイモンはこれらの要素のうち、機能、目標、適応を重視し、そこに自然科学との合流点を見出している。人工物そのものの材料だけではなく、その構造や外的環境(条件)をも考慮し、従来の目的や材料という静的な要素だけを考えるのではなく、構造や組織という可変的な動的要素をくわえることによって、それを「内部」環境とし、自然的あるいは人間的「外部」環境に対置させる。その「接面」(interface)に人工物の特質を読みとろうというわけである。つまり、人工物を一つの完成された結果と見るのではなく、それを基点として外部環境との関係からあらたな目標を引き出すことによって、人工物のあたらしい利用法を生み出すのである。言いかえれば、内外の環

境に適應した人工物がもとめられることになる。この発想の構図は、上例の(1)や(2)の直線型思考の中ではとうていどつりつく問題ではない。内部環境や外部環境の設定そのものもそうだが、両者の関係しあうさまざまなありうる或は生じうる条件は、(c)の階層構造の中において最も有効に成立するであろう。

人工物ばかりでなく、人間の生活もまた内外の環境条件に適應をせまられる。地球上のさまざまな地域に生棲するヒトは、さまざまな遺伝子を内蔵しているヒトでもある。彼らの衣・食・住はそれら内外の環境条件によって、選択と行動をまじえながら、たがにい異化(dissimilation)現象を生じ、ヒトはそれぞれの環境に適應したニッチを形成する。それが文化の萌芽であろうと私は思う。この異化現象は、万物が自己をそれぞれの環境条件に適應させる運動であるがゆえに、時系列の宇宙時間でこれを見れば、変化を目ざす進化過程の重要なモメントであるとも言えよう。Erich Jantschが、「内世界には外世界に見合った開放性があり、いまだにその限界は見えないほどだ。そしてその内世界が逆に後者の開放性を積極的に培おうとすることはきわめて重要である。『自身との相互進化』をおこなう社会的文化的動物としての人間には、自身のさらなる進化のための条件を創りだして行く能力が基本的にそなわっている」¹⁴⁾というのも、人間の dissimilation に想いをよせた実感ではないかと私は考える。

注

- 1) <日本統計月報>No. 378, 平成4年12月, 総務庁統計局, 1992.
- 2) FAO, <Production Yearbook>. なお, 篠浦光『世界の米生産と貿易市場』『カリフォルニアの米作農場と米作地帯の動向』<農業総合研究>45巻4号参照.
- 3) Herbert A. Simon, *The Sciences of the Artificial*, 1981, The Massachusetts Institute of Technology. (邦訳) 稲葉元吉・吉原英樹, 『システムの科学』, 1987.11, パーソナルメディア株式会社, p. 7.
- 4) E. M. Itard, *De l'Education d'un homme Sauvage ou des premiers développements physiques et moraux du jeune sauvage de l'Aveyron*, 1801. 中野善達・松田 清訳『新訳アヴェロンの野生児』, 福村出版, 1987¹¹⁾, P. 54.
- 5) Aeschylus, *Prometheus Bound*, The Loeb Classical Library, 1961, London, 本訳は河底尚吾訳『縛られたプロメテウス』(ギリシア国立劇場台本), 日本文化財団, 1979.
- 6) R. H. Mather はこの部分について, Paley の説を紹介し, κλυω「聞く」は身体的機能, ακουω「聴く」は知的機能というぐあいに区別していることを評価しているが, 両者にはそれほどはっきりした差はないとも言い, その機能は未発達なので心身の調和がとれていなかったと解釈している. 感覚と精神との関係に言及して現在でも示唆に富む解釈である. *The Prometheus Bound of Aeschylus*, 1890, Boston, Allyn and Bacon.
- 7) Aristotele, *The Physics*, II, 1936, The Loeb Classical Library, 1963.
- 8) 英語 nature はラテン語 natura から由来し, natura は na-scor「生まれる」と同語根である. 他方, ギリシア語 γιννομαι「生まれる」は γενεσις「生成」と同根であり, それから (g)natura が派生した. 英語 natural と general とが共に「生成」とかかわりがあることに注目.
- 9) Hesiod, *Works and Days*, The Loeb Classical Library, 1959, William Heinemann LTD.
- 10) Alexander Pope, *An Essay on Man*, The Poetical Works of Alexander Pope, MacMillan & Co. LTD. 1956, Epistle III, 91-98. 上田 勤訳『人間論』, 岩波書店, 昭. 29.
- 11) Jean-Jacques Rousseau, *Sur les Sciences et les Arts*, Seconde Partie, oeuvres complètes 2, Seuil, 1971, p. 58.
- 12) *Observations de Jean-Jacques Rousseau de Genève*, sur la réponse qui a été faite à son discours, oeuvres complètes 2, Seuil, p. 77.
- 13) 前掲書, P. 10.
- 14) Erich Jantsch, *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, 芹沢高志, 内田美恵訳, 『自己組織化する宇宙』, 自然・生命・社会の創発的パラダイム, 1986, 工作舎, p. 485.